



乳幼児をもつ母親の育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale: PSE尺度) の開 発とその信頼性, 妥当性の検討

金岡, 緑

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2007-03-25

(Date of Publication)

2009-06-08

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3879

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003879>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 2 4 8 】

氏 名・（本 籍） 金岡 緑 （ 兵庫県 ）

博士の専攻分野の名称 博士（学術）

学 位 記 番 号 博い第653号

学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当

学位授与の 日 付 平成19年3月25日

【 学位論文題目 】

乳幼児をもつ母親の育児に対する自己効力感尺度
(Parenting Self-efficacy Scale: PSE尺度) の開発とその信頼性,
妥当性の検討

審 査 委 員

主 査	教 授	田 中	洋 一
	教 授	城	仁 士
	教 授	丸 谷	宣 子
	教 授	中 林	稔 堯
	教 授	近 藤	徳 彦

論文内容の要旨

氏名 金岡 緑
専攻 人間形成科学専攻
指導教官氏名 田中洋一

論文題目

乳幼児をもつ母親の育児に対する自己効力感尺度

(Parenting Self-efficacy Scale : PSE 尺度) の開発とその信頼性・妥当性の検討

論文要旨

研究テーマである「育児に対する自己効力感」とは、「育児で直面する経験的なあるいは未経験な新しい状況に遭遇した際に臨機応変に対処できるという確信の程度」である。本研究においては、乳幼児期の育児期にある母親を対象とし、育児に対する自己効力感が高いほど、育児の満足感が得られ、育児により派生するストレスが低減すると仮定した。

育児に伴ない生じる「親役割 (parenting)」の遂行は、親としての新たな自己概念の再構成化を余儀なくされる出来事である。そのため、乳幼児をもつ母親においては、親子や夫婦間などに介在する心的相互作用の中で、自己を現実的に評価する能力が求められる。さらに、育児場面における成功・失敗の原因を冷静に分析し、その原因が、自己の統制内にあるか統制外にあるかを区別して対処しなければならない状況に出会う場合が多く、育児における臨機応変な対処能力が育児に対する遂行可能感を高めていると考えられる。そして、育児に関わる親の自己効力感の高さが、子どもを養育し、社会化を促進するという課題をうまく処理することだけでなく、子どもや夫婦間などにおける相互作用の中で育児に対する満足が得られ、そのことにより、育児負担感が低減されるものと推測される。先行研究において親の自己効力感は、育児の過程の媒介変数として、その妥当性が証明されていることより²⁷⁾、乳幼児をもつ母親のサポート認知に関わる育児負担感の心理社会的背景となることが推測され、各特性要因間の関連性を明らかにする上で有用と理解された。

以上を踏まえると、育児の遂行能力を評価する手段の一つとして、母親の人格特性的な側面である、自己効力感が育児負担感を予測する上で重要な要因と考えることができる。しかし、これまでの国内外における、育児に対する自己効力感の研究の傾向としては、育児能力と子どもの発達との関連での報告、または、母親のサポート認知にかかわる個人の人格特性的傾向として特性的自己効力感をとりあげ、子どもの養育状況、サポート認知、育児負担感との関連を明らかにする量的な研究にとどまっている。そのため、育児の困難さが推測されるに過ぎない。

そこで、研究を進めるにあたり、育児環境における母親の状況を特定の行動と規定し、「育児に対する自己効力感」を明確にする必要があった。その上で、日本の乳幼児をもつ母親の育児の状況を十分に含んだ尺度によって、「育児に対する自己効力感」が測定されることで、母親の育児負担感やサポート認知の程度を把握し、育児に対する自己効力感を高められるよう援助することが課題の一つであり、本研究はその援助手段の開発研究として大きな特色、意義をもつものである。そして、「育児に対する自己効力感」の向上をめざした育児支援の方向性を検討することを研究課題とした。

本論文は序章を含め全6章で構成した。

序章

筆者の問題関心、本研究の意味、研究の主題について述べた。「育児に対する自己効力感」を高める方策を検討するために、その効果を客観的に測定できる新しい方法として、わが国の乳幼児をもつ母親の育児の実情に合った「育児に対する自己効力感」に関する測定可能な尺度を開発することを目的とした。育児負担感の解消・軽減につながる養育者の問題解決能力の向上については、社会的サポートの有無に関わらず、養育者本人のサポート認知に依るところが大きく、この存在を広く知らせ、また、活用する手段として「育児に対する自己効力感尺度」を開発することが急務であることを明らかにした。

第1章

健康生態学のアプローチを検討する上で、その開発の内容に先立ち、「育児に対する自己効力感の理論的背景」として、社会的学習理論あるいは社会的認知理論²⁾の中核をなす「自己効力感 (self-efficacy)」の概念を中心に、文献を中心に概観した。以下のプロセスをととして、主題とする自己効力感について概念分析をおこなった。

自己効力感と類似する概念について、その相違を明らかにした。さらに、自己効力感の先行要件について、各々の概念を分けて定義した。この概念分析をもとに、「育児に対する

自己効力感」の定義と先行要件について明確にし、主題とする「育児に対する自己効力感」について定義した。

第2章

さらに、「自己効力感 (self-efficacy)」の実証研究で用いられてきた指標について検討をおこなった。その結果、乳幼児をもつ母親の育児支援を追及するために、自己効力感は重要な概念であることがあらためて理解された。

次に、育児に対する自己効力感に関する文献レビューをおこなったところ、母親の育児能力が子どもに与える影響については述べられているものの、母親自身のストレスや育児行動との関連を報告した研究は見当たらなかった。

そのため筆者は、母親の人格特性的傾向に着目し、母親の特性的自己効力感が、サポート認知の状況と育児負担感に及ぼす影響をとりあげて分析をし、以下の結果が得られたので報告した。それは、乳幼児をもつ母親の育児に対する否定的感情の認知と支援ネットワークとしてのサポートの認知との関連において、介在要因として、母親の人格特性的傾向である特性的自己効力感が影響していることをあげた。つまり、特性的自己効力感が育児負担感の構成要因である育児に対する否定的感情の認知とサポートの認知における予測因子となる可能性が示唆される内容であった。育児で遭遇する出来事がネガティブであると評価されることでストレス反応が生じ、そのことが母親の人格特性的傾向に大きな影響を与えているように推測された。したがって、社会的支援ネットワークに関する認知の程度が、養育者の問題解決能力の向上を介して、育児負担感の解消や軽減に一定の効果を及ぼす可能性が確認された。

さらには、母親の育児に関する情報や解決策の入手傾向と特性的自己効力感との関連について、分析をおこなった。その結果、育児場面でストレスフルな状態にさらされている、乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感は、精神的健康度に最も強い影響力をうけ、さらに、母親役割受容困難感、情緒的支援ネットワークの認知との関連性が強くなることが示された。これらから、情緒的支援ネットワークが特性的自己効力感にあらためて強い影響を与えることが理解された。すなわち、情緒的サポートによって精神的健康が良好に保たれることが、結果として、本人並びに家族の健康生活の継続・維持を図ることができ、しいては心身両面での育児の負担増がなく、育児の継続・維持にもつながることが期待された。これには、親子や夫婦関係など家族システムをサポートする家族支援や、育児の悩みや不安を抱える仲間のネットワークづくり、親に代わる育児経験者の活用等により、育児に関

わるネガティブな状況でも積極的に対処し育児負担感の低減が可能と考えられた。「育児書・雑誌・テレビ」・「パソコン」による育児に対する否定的感情の低下は、悩みの共有等心理的效果が得られると推測された。特に、母親が携帯電話等を用いたメール交換は、社会的孤立感を抑制し、自己効力感を維持・改善する中で、母親役割受容を促進し、育児ストレスを低減する可能性があるとし唆された。

第3章

この結果をうけて、育児場面に特定した状況で、どのような要因が育児の遂行可能感に関連するのかを明確にする必要が課題としてあげられた。その第一段階として、母親の人格特性的傾向を検討することで、特性的自己効力感尺度の有効性と限界を明確にすることが必要であり、この尺度の概念分析を行った。その結果、母親の育児ストレスを軽減あるいは回避するための支援を考える上で、自己効力感は重要な概念であることがあらためて理解された。育児では、以前経験した事であっても状況に応じて臨機応変に対処することが要求され、毎回特定の方略が通用しないことが多い。したがって、より長期的で一般化した日常場面における行動に影響する特性的自己効力感で説明されることが望ましい。しかしながら、SE尺度と他の心理尺度との間で、精神的健康度を除いて弱い相関しか認められなかった。したがって、目的にあった状況、つまり、母親の育児ストレスと、これに伴う家族生活上の困難を、より直接的に判断する手立てとなる育児に対する自己効力感尺度を用いることが有用と考えられた。

第4章

以上をふまえて、「育児に対する自己効力感」を高める方策を検討する指標として、その効果を客観的に測定できるための「育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale : PSE 尺度)」の開発を試みた。PSE 尺度は、乳幼児をもつ母親の育児に対する自己効力感を測定する1次元の尺度として信頼性・妥当性が証明された。また、PSE 尺度は項目数が13問と適度であり、Parenting Stress Index (PSI) などと比べても、回答に要する時間も短いため、使用が容易で、育児負担感を推測する上でも実用性が高いことが示唆された。さらに、質問項目が肯定的な表現で構成されており、対象者にマイナスイメージを与えることが少なく、回答に心理的圧迫を感じる事が少ないと考えられた。また、調査者は、援助の必要性のあると思われる母親を、簡便で短時間に見出すことが可能であることが理解された。さらに、尺度項目の内容に沿って、母親自身では表現しがたい、あるいは、認知されていない育児の問題について、具体的に話を引き出し、自己効力

感を高めるための育児支援の方向性を確認できるなど、使用方法を検討することによって、保健師などの援助者が援助の指針をすみやかに見出せるツールとして期待できるものであった。今後は、育児に対する自己効力感を高めるための具体的な方策に結びつけるためには、育児に対する自己効力感の先行要件であるソーシャルサポートや母親の健康状態について同時に査定して尺度の精度を高める必要が、課題として残された。

第5章

結語として、本研究で明らかにし得た「育児に対する自己効力感」の概念と健康生態学的意義について、全体をとおして考察し、残された課題について述べた。そして、継続的に「育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale : PSE 尺度)」を中心としたデータを収集するなかで、個々の育児の実情に応じた、育児に対する自己効力感の向上をめざしたアプローチを、見直すことが重要であると考えられた。

[課程博士用]

論文審査の結果の要旨

氏 名	金 岡 緑		
論文題目	乳幼児をもつ母親の育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale : PSE尺度) の開発とその信頼性、妥当性の検討		
判 定	合 格 ・ 不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	田 中 洋 一
	副 査	教 授	丸 谷 宣 子
	副 査	教 授	中 林 稔 堯
	副 査	教 授	城 仁 士
	副 査	教 授	近 藤 徳 彦
要 旨			

本論文は全5章で構成され、現代社会の育児期における家族システムのサポート力の低下が、乳幼児を持つ母親の育児負担感を増強させているという現状を問題の発起点とし、母親自身の育児負担感の解消・軽減を図るための確な評価尺度の作成を目的としている。以下に簡単に内容を紹介する。

既存の育児に関する様々な研究や調査報告から、育児の負担感は、育児の遂行能力と密接な関係にあることが考えられる。しかし、これまでは母親の育児能力が子どもに与える影響などについては述べられたものの、母親自身のストレスや育児行動との関連を詳細に分析した報告はなされておらず、母親の育児期の自己効力感の評価などは研究されていない。本研究では、母親の人格特性傾向に着目し、母親の特性的自己効力感が、サポート認知の状況と育児負担感に及ぼす影響を取り上げ分析を行い、社会的支援ネットワークに関する認知の程度が、養育者の問題解決能力の向上を介して、育児負担感の解消や軽減に効果を発揮する事を確認するとともに、母親の人格的特性傾向を見当することによりSE (self-efficacy : 自己効力感) 尺度の有効性と限界を解明するため、

当該尺度の概念分析を行った結果、母親の育児ストレスとこれに伴う家族生活上の困難を、より直接的に判断する手だてとなる当該尺度の有効性が示唆されると考えられた。そこで、育児に対する自己効力感の選考要件であるソーシャルサポートや母親の健康状態について同時に査定し、最終的な評価尺度として「育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale : PSE尺度)」を作成した。これは、いままでの母親-育児の関係性に、社会・家族・母親の健康状態という現実的な要素を複合的にとらえ研究し、評価開発をおこなっている点が、多に評価できるものである。

なお、本研究で得られた成果を、以下の学術雑誌および学会誌に報告している。全てレフェリー付きの論文である。

- ・ 金岡緑、藤田大輔：乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に対する否定的感情の関連性：厚生指標 2002 ; 49 (6) : 22-30
- ・ 藤田大輔、金岡緑：乳幼児をもつ母親の精神的健康度に及ぼすソーシャルサポートの影響：日本公衆衛生雑誌 2002 ; 49 (4) : 305-313

本研究は、乳幼児をもつ母親の育児負担感の軽減を最終の目的とした研究であり、その目的を達する上で必要不可欠な母親自身の育児に対する自己効力感を評価する尺度を開発したという点において価値ある集積であると認める。

よって、審査委員会全員一致で、学位申請者の金岡 緑は、博士 (学術) の学位を得る資格があると認める。